雑誌『労農』研究
——占領期山形における地方文化運動の再検討のために——

森岡卓司

一　はじめに

本稿は、一九四六年に山形で発行された雑誌『労農』の検討を通じて、占領期における地方文化運動の一側面を明らかにしようと試みる。

占領期の地方文化運動について、多くの資料の再発見とその検討とが近年盛んに行われてきた。ただ、その内実については、大串潤児が「地方文化運動の多くは、戦前との断絶を経験しつつも教養主義的・啓蒙主義的姿勢を維持し、多くは総花的な活動のなかで一部は解体・自然消滅し、また一部は公的な公民館活動・社会教育行政に吸収されていく」と述べるように[1]、一貫する特質や意義をそこに措定することは必ずしも容易ではない。そのような中でも、「文化」というキーワードが持った政治的な振れ幅について指摘した北河賢三の次のような指摘は重要である。

> 戦後の文化運動は、とくに若い世代の「文化」への希求を背景にして、一方には「民主革命」の一環として「文化革命」をめざす動きから、他方には秩序維持的な「文化国家」論的文化主義までのさまざまな潮流が混在しており、多様さと曖昧さを含みながらも、昂揚がみられたところにその特徴があったといえるであろう。[2]

一九四五年八月以降の一定の期間、国内のマスメディアにおいて、「文化」は社会の目指すべき理想を表現する用語として極めて頻繁に用いられることになるが[3]、当然のことながら地方文化運動におけるその多様な用法にも政治的文脈と深く関わったものも含まれた。

『山形新聞』論説委員をつとめ、多くの局面で山形の文化運動に深く関わった児童文学者須藤克三は、占領期山形の文化運動を「疎開文化人の運動」「地域文化人の回復」「労働組合運動」「社会教育運動」「学校教育運動」「やくざ踊り」的芸能」の六類型に整理したうえで、「地域文化人」が、「疎開あるいは帰郷者と反発することなく、むしろそれらの人たちの力と結び合っ」て「排他的でセクト主義の多かった本県文化界を、新しいニュアンスに塗りかえてい」き、また「民間運動の色彩が強かった」「社会教育運動」の「第一線に起用」されたことに高い評価を与える[4]。

占領終了後、ごく早い時期に書かれたにもかかわらず、この須藤の整理はよく行き届いたものといえ、ここに示されたような射程を探求する研究が近年にも見られる。たとえば、地方詩人と丸山薫、高村光太郎をはじめとする疎開詩人との広域にわたる「結び合」いの様相は藤沢太郎によって実証的に明らかにされようとしており[5]、またそうした文学運動の具体的な成果のひとつを示す第二次『至上律』についても、野口哲也によって荒地派を中心にした戦後詩観の更新という意図をもった再検討が進められている[6]。そして、こうした整理の先には、これまで全くといっていいほど注目されてこなかった山岸外史の山形疎開時の活動にも新たな評価を与えることが可能になるかもしれない[7]。

しかしその一方で、「労働組合運動」をはじめとする、いわゆる「政治」的な運動に対しては、須藤は極めて辛辣な評言を与えている。

> 戦前本県においてさかんであった東亜連盟の青年組織も、地域によっては残ってもいたが、意気は全くあがらず、その反米反ソの攘夷論的な主張もやがて埋没していった。また共産党の細胞運動も、農山村に及んだが、生硬な公式論は、青年に好んで受け入れられずきわめて少人数に限られ、地域の青年運動の性格を変えてゆくまでにはいたらなかった[8]。

ここに認められるのは、山形の戦後文化運動を脱「政治」化しようとする明確な意図をもった語りだ、というべきだろう。もちろんこれは、運動の当事者でもあった[9]須藤の実感に基づいたものでもあっただろうし、また、事実に照らして著しく不適切な記述というわけでもない。しかし、こうした事後的な脱色が一定の死角を作り出すこともまた確かで、本稿にとりあげる雑誌『労農』も、その中に隠されたもののひとつではなかったかと思われる。

山形県米沢出身の森英介は、三十三歳で死去するまでにわずか一冊の詩集しか残さなかった詩人だが、自費出版によるその詩集『地獄の歌　火の聖女』（一九五一年二月、題簽・大熊信行、序・高村光太郎）の活字を自ら拾い、印刷を完了させた直後に胃穿孔で急逝する、というドラマチックな生涯もあって、「夭逝の詩人」として一部では半ば伝説化された存在となっている。[10] 森英介を名乗る以前の彼は、佐藤徹（てつ）という別の筆名を用いて、米沢を拠点にした文化運動を試みたことがあり、その際に発行したのが雑誌『労農』であった。

山形の地方文学史に森英介の名前をはじめて加えたのは真壁仁「森英介」[11]であるが、真壁はそこで森の「カトリシズムの詩人」としての側面を最大限に強調している。『労農』についても収録記事の紹介を中心に触れてはいるのだが、それは「晩年もっとも非政治的に、いや反政治的に生きたと思われる森英介という詩人」が例外的に「すこぶる政治的に生き、政治そのものに発言した時期」のものとされ、誌面に表明された編集方針についても以下のような概括が与えられる。

> 行動ヒューマニズムとか行動サムボリズムといった用語のなかには逆に非行動的な観念をかんずるのだが、しかし敗戦後の日本の虚脱と自己喪失の状況のなかで、こうした観念を意欲にまでかきたてながら新しい民主的秩序のための政治の軸をもとめたのである。その政治の理念には、既存の党に属しない清新な第三の党の創造というイメージがあったのであろう。

ここに示されるのは、未熟で場当たり的な「森英介前史」として『労農』期の佐藤の活動を捉えようとする認識であり、この時期の「政治」的な地方文化運動に対する把握として先に引いた須藤とその基本的な志向性を共有している。[12] そして、こうした真壁の『労農』観は、これ以降の時期に間歇的に生じたこの詩人への言及においても、大きな変更を迫られることがなかったように思われる。

本稿においては、こうした従来の『労農』把握を再検討する。『労農』編集期の佐藤徹と『地獄の歌　火の聖女』中の大部分の作品を書いた一九五〇年前後の森英介との間に、大きな転回が生じていること自体は否定しがたく思われるが、そうした詩人の個人史を一旦離れ、『労農』発行の状況そのものを分析してみるならば、既存の政治運動から言説的資源を引き継ぎつつ、独自の批評性を示すに至った占領期の文化運動の具体的な様相を、そこに見出すことができよう。それは、山形の戦後文化史に、先に引いた須藤の記述によって隠された一コマを書き加えるだけではなく、戦後日本、とりわけ東北における「地方」を巡る文化的な言説の出発についても、重要な示唆を与えるはずである。

二　雑誌『労農』の概要

本格的な分析に入る前に、改めて雑誌『労農』とその編集発行人であった佐藤徹、戸籍名佐藤重男の生涯について概観しておきたい。

一九一七年に繊維問屋佐藤治右衛門、志んの次男として米沢市蔵ノ内町に生まれた佐藤重男は、三六年に早稲田大学哲学科に入学し、出隆ゼミに出入りする中で、松浪信三郎、堺誠一郎らを知る。文学や哲学に関心を寄せ、とりわけ、マルローやベルジャーエフ[13]には強い関心を持ったと言われる。単位不足で三九年に大学を中退した後、四〇年に結婚、翌四一年には招集により入隊するが、四三年に病気を理由として招集が解除され帰郷。産業報国隊からの派遣員として縁戚にあたる青柳六一郎が経営する米沢航空で働いた後、山形県飯豊町に疎開、終戦と離婚を経験する。四六年以降は郷里と東京を行き来する生活が続き、この間、熊本日日新聞東京支局勤務やバーの皿洗い、美容品の行商などの職業を経験しているが、実業を営んでいた家族や親戚からの支援が彼の生計の大きな部分を支えていたと推測される。

放浪に近い生活の中、詩作を志していたこの時期の佐藤に強い影響を与えた存在としては、招集時代に初めて手紙を出し、四六年九月に疎開先で面会した高村光太郎、日比谷公園で戦災孤児救済の活動を行っていた高野久子、佐藤からの二通の長文の手紙に対して返信を与えた高田博厚らが挙げられる。その後の佐藤が、森英介名での詩集発行の方途を模索し、自費出版を目前に胃穿孔で急死したことは既に述べた。詩集原稿、書簡およびその原稿、蔵書、来簡、人名帳などの関連資料は、彼の死後、寄贈及び遺族からの委託管理の形で市立米沢図書館に一括保存されている。[14]

雑誌『労農』もこの資料中に含まれているが、全三号のうち二、三号のみの所蔵となっており、欠号となっている創刊号については、国立国会図書館、プランゲ文庫を含め現存が確認されていない。しかし、関連資料がほぼ完全な形で集約保存されていることによって、『労農』の発行環境は、占領期に発行されたほぼ無名の地方雑誌としては例外的なほど実証的に検証可能になっている。

以下に『労農』各号の目次を示し、その概要を確認したい（筆者による注記には※を付した）。

既述の如く、実物が現存しない創刊号（第一巻第一号）については、第一巻第二号の最終ページの記載によってその目次を掲げる。

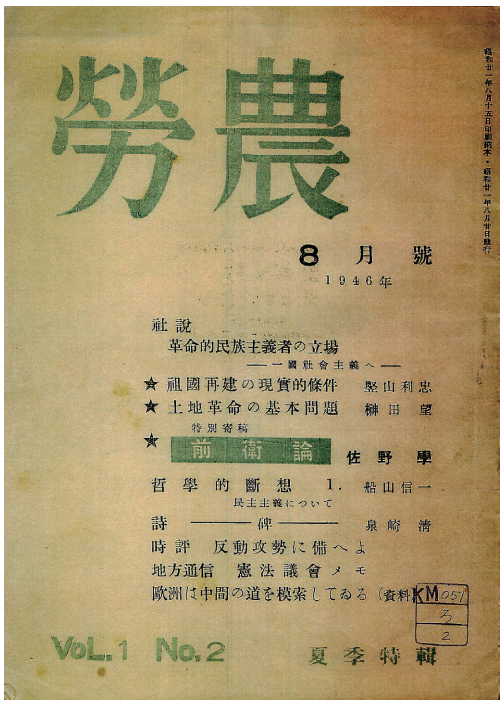
社説　二つの過渡期的体制　革命戦術の提唱
日本農村と農民　榊田望
農村民主運動の構想　山田五郎
民主革命と農村組合運動　榊田望

労働運動とその方向　佐藤徹
労農時評

同欄には「本体価格三円」「郵送料三〇」との表示がある。後に詳しく触れるが、第一巻第三号まで継続的に記載されるこの「郵送料」の表示は、この雑誌の発行にあたって郵送による購読者が想定されていたことを示している。また、社説執筆者についてはここに明示がないものの、次号以降と同様に佐藤を想定することが自然だと思われる。

ついで、第一巻第二号を見てみたい。「八月号」「夏季特集」ともされる本号（B5判、表紙のみ二色刷）は全三十二頁となっており、奥付には「昭和二一年八月二十日」という発行日の記載がある。また、編集・発行人は佐藤徹、発行所は労農社とされているが、その双方の住所は米沢市山王通町にあった青柳六一郎宅となっている。[15] 印刷所の山形荷札株式会社は、後に佐藤が勤め、自らの詩集を印刷した会社でもある。これらに加え、「直接申込所」として「米沢市割出町」の「生活協同協会」が示されていることからは、販売網の拡大を強く意識していた様子がうかがえる。価格は「特価五円（税込）」と変更された。目次は以下の通りである。

社説　革命的民族主義者の立場―一国社会主義へ―
祖国再建の現実的条件　竪山利忠
土地革命の基本問題　榊田望
前衛論　佐野学
記事　労農前衛党　佐野氏を委員長に今秋結党
※「八月一二日朝日紙」との転載注記あり
哲学的断想1　民主主義について　船山信一
碑　泉崎清
憲法議会メモ
時評　反動攻勢に備へよ



『労農』第一巻第二号表紙（所蔵：市立米沢図書館）

地方通信　野坂参三氏著「亡命十六年」を読む（山形　竹山清雄）
労農読書クラブ　テキスト選
資料　欧州の投票者は中間の道を模索してゐることを示す
※「ニユウヨークタイムスオーバーサイズウイクリイ一九四六・六・九より転訳」との注記あり
編集後記（徹）

佐藤の同郷の知友であった泉崎による、『氷島』期朔太郎の模倣的な詩作の他、表紙裏にはドストエフスキー、裏表紙にはニーチェの章句なども引用されているが、「編集後記」にも「労農はこの日我々の敬愛する佐野学先生から特に論稿を賜り胸の熱くなるを覚える」と触れられ、「労農読書クラブ　テキスト選」においてもほぼ半数を佐野の著作が占めるように、本号の構成は佐野学の「前衛論」を中心としている印象が強い。

続いて、最終号となった第一巻第三号を確認しよう。[16]「一〇・一一月合併号」「秋季特大号」ともされる本号（B5判、表紙のみ二色刷）の奥付記載発行日は「昭和二一年一一月二五日」となっている。前号のほぼ二倍にあたる全六十頁への増ページを行っており、価格も「特価一〇円」と倍額に引き上げられた。また、印刷所及び編集・発行人とその住所は第二号と同じだが、発行所名は労農評論社と改められ、その「東京分室」として東京都杉並区の小松清宅住所が指定された。また、「総発売所（直接申込所）」は「米沢市門東町」の「アンドレ書房」へと変更されている。

主張　行動文化について―戦後青年行動サムボリズム宣言―
徹
失業問題とゼネスト　大河内一男
前衛の古歌
農業恐慌は来るか　川野重任
インフレ克服の道　竪山利忠
バルビュス　小松清
アヴァン　ギヤルドの歌―M君へおくる手紙―　佐藤徹
地方報告　政治ゼネスト排撃　長正俊
※「米澤新聞」鐘」との転載注記あり
青年の政治性　※「米沢輿論社説」との転載注記あり
地方報告　田舎町では民主主義が逆流してゐる　平田二郎（福島）
地方報告　農村運動記　白石敏夫
短歌　秋感傷　遠藤達一（宮内町）
労働関係調整法の解説とその批判　牧野朝彦
アジヤ会議　越南の参加を希望　※「世界日報紙」との転載注記あり

日本に於ける合作運動に就いて　杉山慈郎
書評　古在由重　現代哲学
賃金と物価の相互関係　インフレションの役割に関連し「C・I・Oの新政策」※「NEWSWEEK 8・17-8・26」との転載注記あり
雨ニモマケズ
地獄の季節（抄）
記事　インドネシア協定　独立への途ひらく　殖民問題解決に新方式　※「朝日（一一・一九）」との転載注記あり
推薦良書
労農読書クラブ　テキスト選
編集後記　徹

裏表紙における親鸞の引用、社説としての性質を持つ佐藤の巻頭論文末尾に付された「歎異抄」からの引用に加え、本号の誌面には前号を遥かに凌ぐ量の古今東西の文学テクストがコラージュ的に引用される。「前衛の古歌」として万葉歌と芭蕉句作が掲げられ、賢治とランボーの詩を掲出するにあたっては、それが「前衛」なる理念に関わる旨の注記が加えられるなどの処理には、誌面全体にひとつの理念的な統一を与えようとする編集方針をうかがうことができる。[17]

本号のもう一つの特質として、米沢に限らず全国にまたがる地方からの執筆記事がより重視される傾向を指摘できる。第二号においては「地方通信」とされ誌面後半に置かれていた記事は、「地方報告」とタイトルを改められ、掲載の序列と分量との双方においてより大きな扱いを受けており、巻頭には次のような執筆者一覧が掲げられている（引用文中のスラッシュは、原文における改行を表す。以下、同）。

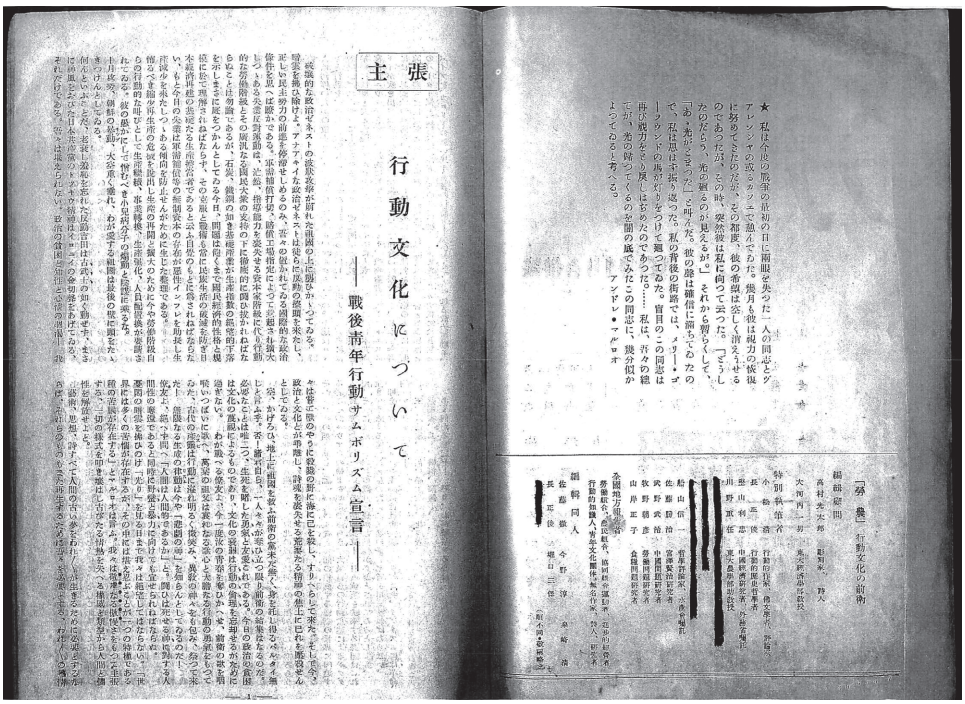
「労農」行動文化の前衛
編輯顧問
高村光太郎　彫刻家、詩人／大河内一男　東大経済学部教授
特別執筆者
小松清　行動的作家、仏文学者、評論家／長正俊　行動的歴史哲学者／竪山利忠　中国経済研究者、外務省嘱託／川野重任　東大農学部助教授／〔※黒塗り三行〕／船山信一　哲学評論家　水産会嘱託／佐藤勝治　宮沢賢治研究者／武野武治　中国問題研究者／牧野朝彦　労働問題研究者／山岸正子　食糧問題研究者
全国地方報告者
労働組合、農民組合、協同組合運動者、進歩的経営者、行動的知識人、青年文化団体、無名作家、詩人、研究者
編輯同人

佐藤徹　今野淳　泉崎清　長正俊　堀口三保　〔※黒塗り一名〕

（順不同・敬称略）

高村光太郎や武野武治の執筆記事は実際には存在せず、また光太郎や大河内が「編輯顧問」としての実質的な役割をどれほど担っていたのか、残存する来簡類を見る限り疑わしい。そうした不確かな部分を含むものではあるが、しかしここに「全国地方報告者」の想定が明確に示されていることは、『労農』が持った志向性の証左として注目に値するだろう。ただし、後に詳しく検討するように、その内実は、須藤・真壁らが志向した「地方」とは完全に性質を異にし、むしろそれらに対立するものとして提示されたものであった。

以上見てきたように、親族の経済的な支えを背景に、[18] 作品発表や政治活動の経験を持たない一青年が発行した地方雑誌としては異例とも思える規模で編集発行された『労農』であったが、その経営方針はかなり大胆なものだったようだ。第二号の編集後記には、「一号僅かに五〇〇部のため忽ち品切れとなり、工場、農村或は生活協同組合の運動に健闘しつつある指導層の渇望を充たし切れなかつたので、熱意に応へるべく二号は一躍一五〇〇部とした」こと、ただし「是は我々の極限であり直に再生産に回転せしめねばならないこと」が述べられる。この性急な拡大方針は第三号編集時にも継続されたようで、『社告　労農支局設置について』というパンフレット



『労農』第一巻第三号誌面（所蔵：市立米沢図書館）

（発行日記載なし）には、「現在の発行部数は僅かに一千五百部に過ぎませんが三号を以て三千部発行をぜひ完遂せねばなりません」との決意が表明されている。創刊号から第三号発行に至るおよそわずか半年余りで発行部数を六倍にもしようとした佐藤の過剰な思い入れに近い熱意が、おそらくはこの雑誌を短命に終わらせた外的要因のひとつとなっただろうと推測される。[19]

三　『労農』出立の思想的背景

先にも触れたように、雑誌『労農』が、この時期労農前衛党を結成した佐野学からの深い影響下に出発したであろうことは、その雑誌名にも明らかにうかがわれる。それまでに佐野を中心のひとりとして推進されていた「一国社会主義」運動を副題に据える第二号「社説」は、強硬な民族革命路線を次のように主張している。

> 今や偉大な祖国再建の歴史的前進は開始された。古き日本の政治社会経済体制とその指導者どもは祖国再建の担当者ではない。／我々は今こそ躊躇することなく彼等の頭上に鉄槌を加え共働共助共栄の旗の下民族革命を徹底し世界平和国家を実現せ（ママ）なければならぬ。我々は民族革命を追求する。／然し我々は民族や国家を超越した国際主義や階級エゴイズムの立場をとらない。それは単なる抽象的世界や万国のプロレタリアートの解放と云ふ理想追求のためにでもない。我々は祖国と日本民族の自由幸福のために闘はんとするものだ。／民族国家を超越した世界概念は抽象的観念論だ。未来は世界民族なき国家なき世界社会であるかもしれない。然してそれは未来であり遠い未来のことである。現実の日本革命の過程に何の関係があらふ。我々は主張する。現代世界とは諸民族の結合体であると。現代世界の到達すべき理想は民族国家を止揚せる世界社会の実現ではない。／現実世界の理想は各々の民族が独立国家を形成し、それらが正義と愛の世界「デモクラシー」によつて結合された世界であることだ。人々は生まれながらにして民族と不可分だ。民族は人類の故郷である。我々が民族の自由、独立、反映を欲するのは本能なのだ。（「社説　革命的民族主義者の立場―一国社会主義へ―」『労農』第一巻第二号）

これが、同号に掲載の佐野学「前衛論」にある、「純粋なる階級指導者なるものは概念上にのみ存する、もし純粋に自己の階級の利益のみを主張する者があれば、それは反国民的なものとなり、とうてい全社会生活を指導する前衛たり得ない」という、ボリシェヴィキ独裁への警戒に基づく階級闘争路線への批判を直接的に継承し、そこに「この偉大な先達の告げるものを我々は新しい感覚で享受し

民族の燃える生命でつゝ」もう（「編集後記」第一巻第二号）という民族主義的なアクセントを加えたものであることは、一読して容易に理解されよう。

佐野への佐藤の接触がいつ頃どのように始まったのかは必ずしも定かではないが、佐藤蔵書には、佐野学の著作『プロレタリア日本歴史』（白揚社、一九三三年十月）、『民族と社会主義』（協同出版社、一九四六年八月[20]）、『民族と民主主義』（九州書院、一九四七年四月）があり、また、当時の佐野や、労農前衛党新党結成準備大会の議長も務めた風間丈吉らが言論の場のひとつとした『民論　革命的民主々義運動月刊誌』についても、四六年刊行号の大半が所蔵されている。この『民論』四六年九月号の「編輯後記」には、「大河内一男先生の論文は、先生旅行中にて本号掲載不可能のため次号へ掲載いたしました」との断り書きがある（ただし実際の掲載は佐藤蔵書及び「大河内一男著作目録」［『大河内一男集』第八巻、労働旬報社、一九八一年八月］からは確認できない）。さらに、同年十月に山形で開催された東京帝国大学普及講座を今野源八郎とともに担当した大河内に「労農誌友」が面会したことが『労農』第三号「編集後記」には伝えられる。これらは、佐藤が『労農』編集にあたって依拠した大きな資源のひとつが佐野の言説圏域にあったことを跡付けるものだと言えよう。

しかし、『労農』第二号の佐藤の「社説」には、佐野とその周圏からの影響とだけは考えにくい言説も含まれている（傍線及び［…］による中略は筆者。以下、同）。

我々は天皇の本質を歪曲した感情論的罵言主義を打倒せんとするものである。同時に又観念論的絶対主義神秘主義を振り翳し天皇を階級支配の手段とし正義と真理をじうりんする如き反動分子の護持論も打倒せなければならぬ。天皇には二面の性格がある。政治的機関、権力関係としての天皇と、日本民族社会の構成要素としての天皇がそれである。前者を政治的天皇、後者は民族的、社会的天皇と云つてもよい。前者は日本政治史の全発展過程を通じてその権力内容を異にして来た。後者こそ天皇の本質であり、日本民族の全発展過程と共に存在し不変であると云ふ歴史的事実に基づくものだ。［…］我々は民族社会の崇高な象徴として天皇を愛慕し、共に東海の小島に綿々として発展し存続せねばならない。日本民族社会の自由と繁栄のため闘はんとするものである。我々は今や絶対的平和国家建設のために全力を傾倒せんとするものである。身に寸鉄の武器なき国家は世界史未曾有のものである。それは如何なる国家の模倣でもない。我々全民族の生死を賭して創造せねばならない崇高な課題なのである。人類は絶対永久平和を熱望してやまない。我々は強国の欲望や専横が理不尽に弱小民族を圧迫し搾取する如き

世界秩序を憎悪する。〔…〕我々は自ら永久に武装を放棄し世界史上最初の道徳文化の高き絶対平和国家の基礎を建設せんとするものである。（「社説　革命的民族主義者の立場―一国社会主義へ―」『労農』第一巻第二号）

戦後の佐野が「天皇私有財産の国家返還」と「天皇自身が社会主義の信奉者になるべき」との論を展開していたことを考えれば、引用前半部分における佐藤の天皇制に関する主張はその亜種として理解することも可能であろう。[21] しかし、「民族的、社会的天皇」を「崇高な象徴」として「愛慕」の対象と位置づけること、さらにそうした「象徴」のもとに「身に寸鉄の武器なき」「絶対的平和国家建設」を主張する段における口吻には、「社会主義者となられる希望は薄い」現天皇の退位をすら唱えていた[22]戦後の佐野ではなく、むしろ石原莞爾の東亜連盟運動をはじめとした、戦中の非主流派勢力からの影響を考えるべきではないだろうか。

終戦直後の石原莞爾の言動が、一九四五年九月十二日に新庄市で開催された東亜連盟新庄大会を頂点として最大風速的に大きな注目を集めたことはつとに知られているが、山形の各地域においては、彼の影響力はその後も一定の形で持続した。[23] そして、その時期の地方紙報道における石原の言説、たとえば『山形新聞』四五年九月九日に掲載された石原莞爾談話記事「再生日本への道」のリード「覇道思想ノ道義で啓蒙」といったものと、引用末尾において佐藤が主張するところの「道徳文化の高き絶対平和国家」とは、内容はもとより用語のニュアンスとしても響き合う。

また、実際に、東亜連盟関係者も『労農』には執筆者として参加している。大河内一男と舩（船）山信一の二人は、東亜学生連盟が四〇年七月に神奈川県鶴巻温泉で行った合宿研究会の講師として参加していた。[24]「東亜連盟協会ニュース」（『東亞連盟』第二巻第八号、一九四〇年八月）掲載の「東亜学生連盟合宿研究会報告」欄には、大河内一男、永田清、田中直吉、木村武雄らが合宿講習会講師として参加した旨の報告が寄せられる。続く同誌第二巻第九号（一九四〇年九月）には、その講義速記として舩山信一「新秩序の思想的基調」が掲載されており、「帝国主義でもなく、又抽象的な国際主義でもない、第三の道としての民族協同主義、而も、世界が地域的に四つくらゐに分れてかたまるといふ考へ方」を「更に国内に普及させると同時に、支那に対しても、三民主義をさういふ方向に導いてゆくといふことを説くべき」との主張が展開されているが、これは『労農』第二号の舩山「哲学的断想1　民主主義について」における共産主義批判及び三民主義への評価と連続している。

もちろん、『労農』に対するこうした東亜連盟運動からの影響の輪郭は、佐野からのそれのような明確さをもって確定することはできない。少なくとも佐藤のテクストには石原への明示的な言及は存

在せず、また蔵書にも石原に関連するものは見当たらない。しかし、後に『地獄の歌　火の聖女』に題簽を寄せ、発行を担う「火の会」の会長も務める大熊信行は、東久邇宮施政方針演説に対する石原の関与に関心を寄せていたひとりであった[25]し、佐野学自身にも「国内改革案―石原将軍に贈る書―」（初出不明、末尾に「二〇・九・一九」の日付あり）[26]と題した論説があるが、それらの章題構成及び内容は先述の佐藤蔵書『民族と社会主義』とほぼ重なっている[27]。

さらに、佐藤の蔵書には大川周明や三木清、根本瑛ら、昭和維新運動や昭和研究会、国民運動研究会などに深く関係し、四五年当時には非主流派とみなされていた思想家の著作も多数含まれている。これらの要素は、より背景的な位置を占めながらも、当時の佐藤を囲繞する言説圏に浸透していたと見るべきではないだろうか。

『労農』第二号についての以上のような把握が妥当だとするならば、この雑誌の出立にあたっては、既存の政治言説的資源に依拠する部分が極めて多かったということになる。「東亜連盟の青年組織」運動として須藤が念頭に置いた[28]ものの中には、この『労農』も含まれていたのではないか。

次には、そうした出自を持った政治論説雑誌『労農』が、その後の展開においてどのような独自性を持つに至ったのかを検討してみたい。

四　「行動」の浮上

『労農』第三号は、その新たな編集方針を「編集後記」において次のように記している。

「労農」は三号で如何なる政党とも関係なくまさに行動主義文化運動の前衛者として新地方主義を掲げ行動ヒユウマニズムの創造的闘ひに青年の熱情を賭すべくはつきり方向を決定した。何分誌友諸兄の支援を期待する。若く無力であるが元気いつぱいである。創刊より同人として本誌の推進に努力を傾注された榊田望兄は主として政治と文化の背理により外部から援助して下さることゝなつた。過ぎし友情を想ひご健闘を祈るや切。

（「編集後記」『労農』第一巻第三号）

ここに提示される主張は、既存政党の影響圏からの離脱、新たな運動方針としての「行動主義文化運動」と「新地方主義」、「政治」と「文化」との融合、という三点に要約できようが、それらを同号掲載の各記事に即して検証することで、『労農』が第三号において示した地方文化運動観を明らかにしてみたい。

まず、第二号において顕著であった佐野学からの影響の変質から

検討する。前号の如く「一国社会主義」を旗印にした民族革命を具体的に主張する傾きが第三号から姿を消し、代わってヒロイックな「前衛」観念が前景化することには既に触れた。ただ、「一国社会主義」の主張と同様に、その「前衛」観念もまた、前号の佐野「前衛論」から発してはいるのだが、その解釈の力点は大きく変化している。

前衛は何よりも精神的力の旺盛な人間でなければならぬ。人一倍強い勇気、闘志、創意性、名誉を重んずる心、直感力、計画力等が必要な属性である。状勢や運動の全面を展望する能力は不屈の闘争をつみかさねてゆくうちに遂には本能にまでなつてしまふ。かくして彼は歴史の大勢にリードされずして、むしろ、これをリードするやうになる。／前衛は強い個性、強い自信をもち、且つ自己犠牲を恐れぬ勇気ある個人でなければならない。彼の闘争は自己一身の利益や快楽のためでなく、徹底した愛他主義が彼の内部に流れる。大いに自己を愛する事と、大いに他人を愛する事は一致する。前衛は危険や苦痛をむしろ歓迎する人間である。危険や苦痛こそ、前衛を訓練し且つ全社会を発展させる最高級の力である。（佐野学「前衛論」『労農』第一巻第二号）

民族主義革命の具体的な目的や方途ではなく、それを牽引するべき英雄の人格的な卓越性を説く佐野「前衛論」中のこのような箇所に焦点を合わせ、それを、昭和十年前後の日本に紹介されて一定の注目を集めた行動主義文学運動と重ねて再解釈したところに、「諸君自ら一人々々が奪〔ママ〕奮カ〕ひ立つ限り前衛の結果はなるのだ。必要なことは唯二つ、生死を賭した勇気と友愛これである」（「主張行動文化について―戦後青年行動サムボリズム宣言―」『労農』第一巻第三号）という佐藤のアジテーションは生じる。こうした「前衛」観は、佐藤と親しく交流し、『労農』第三号に作品も寄稿している小松清によって主導された日本における行動主義文学運動が、いわゆる「シェストフ的不安」に対するアンチテーゼとしての文学的な姿勢を示しつつも、実作上の成果という点では見るべきものをほとんど残さなかったのと同様に、成果目標や運動論の具体性からは次第に離れて行くことになる。

この「前衛」観を契機にして、佐野においては「前衛は政治的なものである文化的、宗教的、芸術的前衛などといふものは存在しない」（「前衛論」『労農』第一巻第二号）とされていたはずの「政治」と「文化」との分別は、『労農』において乗り越えられていくことになる。

「一国社会主義へ」と嘗て我々は言つた、祖国の半植民地化を防止せよ！階級闘争の徹底を通じて民族の復興へ！然り、けれ

どもこのために世界性と人間性を失つてはならずこれを生かすためにはどこまでも民主主義的な個の自由の立場、豊なヒューマニズムの精神を容れてゆかねばならないし、政治運動と共に文化活動が要求されてゐるのは自明である。否！我々は、その様な「政治闘争」「文化活動」を否認するのだ。其れは二つのものでなく一つのものである。我々の闘ひが文学であり哲学であり、我々の作品は、歌に身を曝す行動そのものである。そして彼の低俗なるプロパガンダ小説など認めないのだ。むしろ無心なる画家のたゆまざるスケツチに、孤高の詩人に、静かなる教授の秘められた熱情に革命の青い火を見るのである。

（「主張　行動文化について―戦後青年行動サムボリズム宣言―」）

問題は「行動」の内容や結果ではなく「行動」することにあり、すなわち「我々の作品は、歌に身を曝す行動そのもの」なのであるから、結果に奉仕する「プロパガンダ小説」は真っ先に批判の対象となる。「一国社会主義へ」という目的論的なテーゼが揚棄されるのはこの観点においてであり、逆に、どのような「作品」＝「行動」にも、恣意によって「前衛」を認めることが可能になる。[29] こうしたロジックのもとに、『労農』第三号誌面においては、先に見たように、政治論文と同等以上の扱いをもって古今東西の文学作品が「前衛」性を示すものとしてとりあげられることになったと考えられる。

その中でも扱いが最も大きなもののひとつは、先にも触れた小松清の小説「バルビュス」である。ここでは、主人公佐伯が「フランス左翼文芸の代表的作家」であるバルビュスに面会するまでの経緯が物語られるが、作中ではバルビュスの思想の内実、あるいはそれが形象化された作品の価値といったものはほとんど問題にされていない。そうではなく、兵士としての体験を持ち反戦運動に身を投じるというバルビュスの「前衛」性が英雄化され、彼に面会することで「青春の過剰さからきたともいへる孤独の感情」から佐伯が抜け出そうとする様子が、自死した友人である画家梅田の芸術的耽溺と対比しつつ描かれる。この作品に語られる物語世界においても、問題はやはり、思想の具体的な内実やその結果ではなく、「行動」という態度そのものであった。

そうした徹底した抽象性のもとに「行動文化」を見出していくさまには、真壁の指摘したようなある種の未熟さの存在を認めないわけにもいくまい。[30] しかし、目的論的な思考を拒絶する異様な熱量にこそ、この運動の倫理的な純粋性が存在したのだとも言えるだろう。[31]

そして、このような形式をとった「行動文化」の主張がもたらした独自の「地方」把握の位相において、『労農』の同時代的な特異性は明確に現れることになる。

五　「新地方主義」の内実

『労農』が発行した『社告』には、次のような呼びかけがある。

労農社は此度その正しき発展のために定期予約会員を募り、各地に支局を設営することに致しました。（現在山形、福島、秋田、新潟、長野、愛知、鳥取、熊本各一）〔…〕誌友の皆様は極力同志の獲得に努められると共に出来るだけ労農の研究グルウプをおもちになる様切望します。研究会には必ずテキストとして特定の本又は論文を指定し、事前に読まれた上、真面目に討議なさつてはと考へます。必要に応じては微力ですが努めて講師をお世話申上げます。（『社告　労農支局設置について』発行日不明、内容からは第二号と第三号との間に発行されたものと推定）

ここに記された支局の設置実績と研究会活動とが、果たしてどれほどの実態を伴い得たのか定かではないが、『労農』が地方支局活動への志向性を強く持っていたことは確実であろう。

そして、こうした形式の地方支局活動を構想するに際して、『労農』は先行する雑誌に範を取ったものと思われる。国際日本協会が発行した雑誌『復興亞細亞』が佐藤の蔵書に含まれるが、その誌面には、「国内維新と東亜民族結集とが両々相俟つて戦争完遂の力を充分に形成し得る」という目標のもと、「二、可能なる範囲内に於て誌友会を組織」することが読者に求められ、「三、地方誌友会発展に誌友の実践上必要なる場合には本誌は講師を斡旋派遣し得る用意を有する」ことも告知されている（『復興亞細亞』、一九四四年十二月）。また、先にも触れた『民論　革命的民主々義運動月刊誌』の四六年九月号掲載「読者の皆様へのお願ひ」には、「民論の正しきコースを実現し、平和的祖国再建に邁進するため」に「支局を一層強化」する必要に即して「全読者諸兄は、挙つて年極直接読者の獲得に参加して下さるやう」という希望が述べられるとともに、「現在支局は準備中のものを含めて二八〇に達しました、その大部分は労働組合、農民組合、文化団体、地方政党、政党支部、学生グループなどです／直接個人購入の読者は四〇〇〇名」という現状が宣伝される。これらの事例に倣うかたちで、『労農』においても支局の設置と強化が目指されたと考えられる。

また、菊田一雄『新しい生活――生活協同組合の話』（日本協同組合連盟、一九四六年一月）、賀川豊彦『協同組合の理論と実際』（コバルト社、一九四六年六月）などの所蔵からは、戦後の日本社会における組合組織運動への関心もうかがわれる。さらに、パンフレット『教養組合とはどんなものか』（日本教養組合連盟、発行日不明、掲載の規約の日付は一九四六年五月）における「単位教養組合のなかに

〈読書グループ〉を作つて回読制度を設け、読書会や研究会を開いたり或は付帯事業とし〈組合文庫〉を設け死蔵図書を開放」することへの呼びかけは、『労農』中に「労農読書クラブ　テキスト選」を掲載するという発想にヒントを与えたのではないかと思われる。[32]

戦後の地方組合活動においてもこうした読書共同体は多く作られており、山形地方においても、たとえば結城哀草果の「話の会」に端を発し、横尾健三郎の本沢村農業会を経由して戦後に引き継がれた文庫の存在[33]などをその代表的な例として挙げうる。ただし、『復興亞細亞』や『民論』の支局路線を忠実に引き継いだ『労農』は、先の『社告』が示す通り、各地方支局における活動の目的を「テキスト」の事前読了を前提とした「討議」に限定し、それぞれの地方の個性や特質の発見には置かなかった。

一九四五年八月に前後する一定の時期、疎開や敗戦を契機に、東北の地域性を再考しようとする言説が盛り上がりを見せる。明治以降の都市文明の臨界を主張し農工一体の国家再生を主張する石原の言説もその一翼を担っていたが、ここでは、先にも触れた舩山信一が、河北新報社発行の雑誌『東北文学』に発表したテクストを、その代表的な例として参照しよう。

保守主義は東北をしていつまでも封建的ならしめたものであつた。東北人は器用ではない、小利巧に立回ることが出来ぬ。之が明治維新の際に東北を立ちおくれさした所以である。維新以後に於ても東北は遂に日本をリードする地位には立たなかつた。然し東北は又あくまでも古きに立てこもつて亡びて行く程かたくなではなかつた。後からではあるが結局新勢力について行つてその建設を全からしめたのである。東北人が政治に、経済に、軍事に文化に幾多の人材を輩出さして、いはゞ殿軍の役割を果したのである。／私はこの保守主義は然し日本にとつて貴重なものであらうと思ふ。熱し易くさめ易いのが日本人の特色といはれるが、その欠陥を匡すものは正しく東北人のこの保守主義である。〔…〕／日本国民の前途には今や長い忍苦の途が横たわつて居る。之に耐えることが出来るのは日本精神中特に東北的な分子でなければならぬ。

（舩山信一「東北的性格」『東北文学』一九四六年一月）

「東北」という地域的な枠組みは、明治以降の日本社会において「器用ではない、小利巧に立回ることが出来」ないために「立ちおくれ」ながらも「殿軍」として重要な貢献を示した「保守主義」「東北精神」によって実体化される。そのうえで、来るべき日本社会全体の範とすべき姿を示すものとそれを定位して、「日本精神」の内部における「都市（東京）」と「地方」との地位関係の反転を狙おうというのが舩山の主張である。だが、その意味で、日本の近

代社会の在り方を総体的に見直そうというこの発想は、やはり、明治以降の〈日本／東北〉という包摂構造の枠内にとどまっているとも言えよう。

『労農』第三号の「主張」（社説）においても、たとえば「頽廃と浮浪の都市文化」を「原始の人間地方」によって超克しようとする主張などは、同時代にほとんど類型的な「東北」言説だと考えられる。また、中国の動向に対する「生命的な関心」を表明する箇所には、前号掲載の舩山「哲学的断想1　民主主義について」からの反響を見ることもできるだろう。しかし、「セクト的な郷土趣味」へ向けられた次のような批判は、そうした枠内からは理解し得ない。

けれども我々は単なる中央の破壊と地方との交流を望むといふのではなく地方における文化運動を言ひ行動的に芸術・思想・政治を問題とする場合こゝで世界的な高さと魂の深さを要求してゐるのである。事実宮沢賢治を生み高村光太郎をもつ東北はひとつの形而上学的な地方世界を示してゐるのである。個性を愛し民族のよき伝統とゆかしきものを何処までも生かしてゆかんとする心情はセクト的な郷土趣味に自らを閉ざさんとするものでなく、既に幕末以前の版図にかへつた国土はひとつの日本地方に過ぎず、荒廃の日本を何う開墾してゆくかといふのは我々の切実な問題である。／我々の地方主義は世界的な意義を含んでゐる。ゲエテは独逸的で世界的であつた。

（「主張　行動文化について―戦後青年行動サムボリズム宣言―」）

「地方における文化運動」は、「行動」という概念に媒介されることで、日本あるいは世界という全体に対する部分としてではなく、「形而上学的な地方世界」としての全体性を確保する。『労農』第三号において主張される「新地方主義」の輪郭を、没論理的な飛躍を含む佐藤の言説から明確にすることは必ずしも容易ではないが、しかし、こうしたそれ自体としてトータルな「世界的な意義」の主張こそが、その根幹を形作るひとつであったことは確実だろう。

たとえば、『労農』第二号「編集後記」における、泉崎清の詩「碑」の中に「東北の農民の心情」を見出すべきといった類の主張は、宮沢賢治を引用する際の『労農』第三号誌面には見られず、「前衛」性の主張がそれに代わっている。[34] また、「地方報告」欄に掲載される四つの記事も、第二号同欄の野坂参三『亡命十六年』（時事通信社、一九四六年六月）批判とは異なり地方社会に生じた事象についても触れる内容とはなっているが、それらの結論が各地方の個別性に言い及ぶことはない。

このように、『労農』第三号の主張した「新地方主義」は、「われわれの芸術や思想は現実との接触生活の媒介がなければ、たんなる技巧となってしまうおそれがあるという方法意識」という真壁の指

摘[35]とは異なり、むしろそうした経験的な「地方」からの離脱をこそ志向したと考えられよう。

六　『労農』の終焉と地方文化運動の臨界

前節までに論じてきた、第三号に至る『労農』の変容を総合的に示すものとして、『労農』第三号の誌面において編集方針等を告知する記述を参照しよう。

［1　編集方針］民族的コースに立つ民主革命の行動理論探求／行動主義文化運動の前衛／詩魂の恢復による政治・文化の行動的統一と表現／新地方主義の行動ヒユウマニズム的創造／戦後青年の行動サムボリズム運動／研究室と生産現場の交流、地方報告

［2　編集網の確立］各地方の情報・意見・作品を活発に交流／読者との共同編集・通信員の拡充／世界の政治文化との具体的接触／定期会員の作品・論文掲載

［3　頒布網の確立］急速に全国各地の誌友拡大運動を展開せよ！／行動主義文化サアクル、労働組合、農民組合、生活協同組合、交通・鉱山関係のあらゆる生産点に活動する心ある能動分子に訴へよ　進歩的経営者も技術者も立て／一人の誌友は七名の同志を、新時代の建築家出でよ！／書店からの読者は定期会員へ、支局の設置へ！

（「我等の「労農」を強化せよ!!／詩精神を奪還し行動の哲学を創造せよ！／新しき夢のために闘へ！」『労農』第一巻第三号）

第二号の同欄[36]には一度しか用いられていなかった「行動」の語が、ここでは、乱用といっていい頻度で用いられる。たとえば、「民主革命実現のための具体的指導理論の探求」とあった部分は「民主革命の行動理論探求」と改められ、「地方的なるもの―政治―文化の重要性　認識」という曖昧さを残した表現は「詩魂の恢復による政治・文化の行動的統一と表現」と一歩踏み込んだ表現に書き換えられている。これらは、先述のように「前衛」の人格的卓越性を担保するものと設定された「行動」概念によって、「政治」と「文化」と双方の具体的な分別を揚棄し、「詩魂」という抽象性においてそれを包括しようとするものである。また、「地方的なるもの」という文言の消去は、その抽象化の企図によって、「地方」の具体的な内実を探求する志向性も棄却されたことを反映しているが、こうした発想が、戦中から続く類型を継承したものでもあったことも既に論じた通りである。

もちろん、この「地方的なるもの」をめぐる変化は、完全な転向、断絶としてのみ捉えられるわけではない。先に触れた事例にしても、

泉崎の「碑」を評するに際して（「先住の裔」という民族的な他者性を示唆する詩句は無視しつつ）詩句中にはない「芋を噛ぢ」る姿を付け加えて「東北」のステレオタイプを付与する第二号の「編集後記」と、賢治「雨ニモマケズ」に「前衛の心」を見出す第三号の誌面との間に、既存の対立的な区分（中央／地方、大衆／前衛）を援用した有徴化ないし卓越化としての「地方」表象という共通性を認めることは可能であろう。

ただし、第三号に至って、そうした「地方」表象は、「行動」という徹底して非実体的な理念と結びつくことで、既存の「東北」イメージによる実体化の軛（くびき）を逃れ、その恣意性を全開にして浮遊し始める。「ニユウギニヤの海で」戦死した兵士が「前衛（アヴァンギャルド）」として「政治ゼネストの危機を訴へ」るという挿話を含む佐藤自身の詩作「アヴァン　ギャルドの歌―M君へおくる手紙―」（『労農』第一巻第三号）は、「行動文化について―戦後青年行動サムボリズム宣言―」とともに、『労農』第三号が到達した地点を示している。

〈全体／部分〉の包摂関係を用いたアイデンティティ・ポリティクスとしての「地方」の表象は、相反する二つの要素を常に含みこむことになるだろう。一つは、独立した部分としての個性を示す特異性ないし個別性であり、もう一つは、にもかかわらずそれが全体に含まれることを示す普遍性ないし共通性である。たとえば、先に触れた舩山に代表されるような占領期「東北」表象言説は、日本（民族）の復興という目的を日本全体に普遍的に共有される共通性として設定した上で、その実現のために優位な要素を他の地方と比べて「東北」がより多く保持している、という特異性を近代における歴史的経験に即して言挙げし、部分としての「東北」の優位性を表象していた。

河西英通[17]によれば、後進性というレッテルを貼られ続けてきた日本近代史における例外的な高揚期を迎える第二次世界大戦下の「東北」を巡る言説は、中央都市の復興が進む戦後に至って再び沈静化していくことになる。こうした道行きは、〈全体／部分〉という包摂構造に支えられる「地方」表象が逃れ得ない隘路を指し示していよう。しかし、「一国社会主義」という具体的なイデオロギーの代わりに「行動文化」という抽象的な概念と結びつき、経験的な「地方」からの離脱を志向した『労農』第三号においては、そうした相互補完的なアイデンティティ・ポリティクスは溶解している。

占領期地方文化運動としての『労農』に今なお省みられるべき特質があるとするならば、それは、政治的文脈を来歴に持つ「行動主義文化」の標榜の中に、「地方」としての「東北」表象に対する批評性を浮上させた点に求められよう。一面において戦中から続く類型的な言説の反復という側面も持つ『労農』を、戦後山形における地方文化運動史の固有性を揚言しようとした須藤がその記述から消去したことは当然であったかに思われるが、その際に生じた死角に

よって、こうした「地方」表象の構造に対する批判もまた隠されることになった。

佐藤はこの後、高村光太郎宛[38]に「小松清氏等と、行動いたします。／何も彼も、承知の上で。／世界の人類に向つて、私は私の声で一つの叫びをあげることゝ思ひます」と告げて米沢から離れ、『労農』及び労農評論社の運動は以降再開されることがなかった。『労農』の廃刊には、用紙の不足という物質的な問題も影響していたことは事実であろうが、加えて、こうした経験的な「地方」の個別性から離脱しようとする内在的な論理によって、『労農』が占領期地方文化運動としての臨界に到達した、と考えることもまた可能である。

付記：本論文は科学研究費助成共同研究「占領期ローカルメディアに関する資料調査および総合的考察」（基盤研究（B）、16H03386、研究代表者大原祐治）の成果の一部である。また、資料調査とその掲載にあたっては、市立米沢図書館ならびに森英介ご遺族佐藤知由氏に格別のご配慮をいただいた。記して感謝する。

註

（1）大串潤児「戦後の大衆文化」、吉田裕編『日本の時代史26　戦後改革と逆コース』吉川弘文館、二〇〇四年七月。

（2）北河賢三『戦後の出発　文化運動・青年団・未亡人』青木書店、二〇〇〇年十一月。

（3）もちろんここには一九四五年九月に行われた施政方針演説を含む東久邇宮稔彦首相の言説の影響が認められよう。

（4）須藤克三「山形県の青年文化運動史――生活記録運動を中心として」、山形県社会教育研究会編『農村における小集団の研究』北新社にいぜき印刷所、一九五八年三月。

（5）藤沢太郎「岩根沢文学誌稿――山形県のある詩人疎開地における文学的コミュニティの形成と展開」『桜美林論考　人文研究』第三号、二〇一二年三月。

（6）野口哲也「戦後詩のなかの『至上律』」『武蔵野大学武蔵野文学館紀要』第六号、二〇一六年三月。

（7）「動かざる大地に剛健にして優雅なる文化の殿堂を建設せんと、文芸評論家山岸外史氏を委員長とする米沢青年文化連盟は、去月二十四日米沢工専講堂で結成式を挙行し」、「科学、経済、思想、文化と各団体を設けスケジュールを組んで大いに青年の文化啓蒙に働きかける筈」（『米沢自由新聞』一九四六年三月十一日）と華々しいスタートを切った山岸外史の米沢における地方文化運動は、しかし、三年後の『米沢新聞』（一九四九年十二月二十日）掲載の「文化団体〝散りぬるを〟」では「有象無象の文化団体と称するのが出現したがいずれも花火線香的な光彩を放ったのみ」で、「終戦当時華々しく活動した米沢青年文化連盟は何時ともなく姿を消し」たと振り返られるのみで、山岸のその後の文学活動の失速という条件も重なって、現在までほとんど顧みられることがない。この点については、高橋秀太郎「山岸外史」（日本近代文学会東北支部編『東北近代文学事典』勉誠出版、二〇一三年六月）、拙稿「「やまがた再発見」63　山岸外史」（『山形新聞』二〇一一年九月四日）など参照。

（8）須藤克三「山形県の青年文化運動史――生活記録運動を中心として」（前掲）。

（9）須藤は『山形新聞』の経営権及び編集権をめぐる、いわゆる「山新騒動」

に労組委員長として関わり、一九四八年には山形新聞社を退職、非常勤嘱託となった。

(10) たとえば、雑誌『詩学』一九七〇年十月号には、親交のあった松浪信三郎によって、日本近代詩史を代表する「異端の詩人」として大きく紹介されている。

(11) 真壁仁「森英介」『山形新聞』一九六一年十一月六日～十二月四日（『文学のふるさと山形』郁文堂書店、一九七一年六月に収録）。

(12) 一九五九年の参議院地方区補欠選挙に社会党候補者として出馬し落選した真壁も、須藤と同じく政治的な挫折を味わっている。

(13) 松浪信三郎「『火の聖女』の森英介」（『詩学』一九七〇年十二月号）、「私のなかの森英介」（『心』一九八〇年八月号）は、佐藤が自らの衣服にマルローのネームを入れていたり、卒業論文執筆のためのベルジャーエフの英訳本の訳読に松浪を付き合わせたりしたことを回想している。また、ベルジャーエフ英訳本の一部は、後に佐藤から深瀬基寛へと送付されたことが、一九四八年十月十二日付深瀬基寛宛書簡に記されている。

(14) その主要部分は、詩集『地獄の歌　火の聖女』再版（北洋社、一九五〇年一月）の復刻（火の会、一九九七年三月）の際に発行された資料集『愛と漂泊と受難の詩人　森英介』（火の会、一九九七年三月）に紹介されている。

(15) 泉崎清「詩集「火の聖女」と森英介」（米沢文化懇話会『米沢文化』第三号［一九六八月九日］に「詩集　火の聖女　森英介（佐藤徹）について」として初出、参照は前掲『愛と漂泊と受難の詩人　森英介』による）は、四六年四月から四七年三月まで佐藤が青柳宅の同居人となっていたことを示す米の配給通帳が存在したことを伝えている。

(16) 市立米沢図書館蔵の本号には表表紙の一部、執筆者一覧、編集後記などに、検閲によるものとは考えにくい墨塗り修訂の箇所がある。この経緯については定かではないが、前掲の真壁の連載記事には墨塗りのない本号書影が挿入されていることから、佐藤自身の手によって行われた可能性もある。

(17) 賢治「雨ニモマケズ」全文の末尾には「これは　永遠の　前衛のこゝろ！」、ランボー『地獄の季節』中の「朝」の一節の後には「ランボオの「朝」を／前衛は　常に　「真書」に告知する！」という文言が付け加えられている。

(18) 第二号巻末には「寄付金及会費　自七月一日至八月五日」が示される。会員会費による「基金」が「一千三百円」なのに対し、佐藤徹本人、青柳六一郎、そして佐藤の実家が営んだ「佐治産業株式会社」など地元企業から集められた寄付金は「合計七千円」に上っている。

(19) こうした推測を裏付けるものとして、第三号「編集後記」には「「労農」は次号より隔月刊とし月刊を改める。用紙の関係である」と紙資源の確保の困難さに触れる部分があり、また一九四八年十月十二日付深瀬基寛宛書簡、一九五一年三月三十日付高橋新吉来簡には、後年に至るまで佐藤が第三号の複数の在庫を抱え持っていたことをうかがわせる記述がある。

(20) 発行日からは前後関係が微妙ではあるが、『民族と社会主義』「第三章　民族と階級について」に見られる次のような箇所には、『労農』第二号「社説」が用語の水準から直接的な影響を受けたのではないかとの想定も可能であるように思われる。引用は『佐野学著作集』第二巻（佐野学著作集刊行会、一九五七年十一月）による、傍線は筆者。

民族は抽象的存在でない。民族を構成してゐる要素を知ることに由つて民族とは具体的に何であるかを知り得る。（四、民族の人民的勤労者的特質）

資本主義発展期に於ける国民主義は対内的には政治上の民主主義を、対外的には市場の拡張を、目標とし、資本家階級がその実現の担当者だつた。今日の国民主義―進歩的意義をもつ所の―は、資本主義が衰頽し、社会主義の諸条件の熟したことと照応して、資本主義の維持を

目ざすものでなく、却てそれを除去して一国的社会主義を建設するを目ざすのであり、――その担当者は、当然に労働者階級を中心とする勤労者大衆である。（八、プロレタリア的国民主義）

（21）福家崇洋「一国社会主義から民主社会主義へ――佐野学・鍋山貞親の戦時と戦後」『文明構造論　京都大学大学院人間・環境学研究科現代文明論講座文明構造論分野論集』二〇一三年九月。

（22）佐野学『天皇制と社会主義』協同書房社、一九四六年二月。引用は『佐野学著作集』第二巻（前掲）による。

（23）大野六弥『激動のドラマ…その証言…山形県の戦後秘話』（高陽堂書店、一九八〇年十一月）は、一般に「リベラル」と見做された戦後の山形政界において五〇年代まで石原シンパが存在し続けたことを当事者として証言している。

（24）大河内と舩山のこの会合への参加については、仁科悟朗「満州国の建設者――石原莞爾・浅原健三」（思想の科学研究会編『共同研究　転向5　戦後編上』平凡社、一九六二年四月、引用は東洋文庫版、二〇一三年二月）注（69）に、「たとえば〔一九四〇年〕七月の〔東亜学生連盟〕合宿研究会には三〇名の連盟員が集まり、鶴巻温泉で講師に、舩山信一、大河内一男、永田清、田中直吉を迎えている」という指摘が既にある。

（25）吉田裕「戦後改革と逆コース」（吉田裕編『日本の時代史26　戦後改革と逆コース』吉川弘文館、二〇〇四年七月）には次のような指摘がある。

東久邇宮と石原の思想に重なりあう所があることを、当時から認識していた人もいた。大熊信行もその一人で、「（東久邇宮が）その考へを纏められるについては、予め多方面の意見を聴取されたであらうことは想像に難くない。そして石原中将が私見を開陳申上げた有力な一人であつたらうといふことも想像していいし、宮殿下がそれらを大いに参考とされたといふやうなことも、大いにありうることと考へてよからう」と述べている。

（26）『佐野学著作集』第五巻、佐野学著作集刊行会、一九五八年六月。

（27）また、東亜連盟協会の初代会長を務め戦後も保守政治家として長く政界で活躍した木村武雄（四六年は公職追放中）も米沢出身であるが、佐藤との交流の有無は定かではない。

（28）須藤克三「山形県の青年文化運動史――生活記録運動を中心として」（前掲）。

（29）ここに言われる「画家」「詩人」「教授」は、『労農』が第三号から「編集顧問」とした高村光太郎と大河内一男とを暗に指すと思われる。

（30）真壁仁「森英介」（前掲）。

（31）『労農』の活動を終えた一九四八年、佐藤は高田博厚宛に長文の書簡を二通送っているが、その中に示される日本共産党に対する批判は、こうした「行動文化」の発想の延長上に書かれたと考えられる。この批判自体は、吉本隆明「転向論」（『現代批評』創刊号、一九五八年十二月）を先取りするような内容を含むが、しかし、佐野学・鍋山貞親に向けられた吉本の「民族と階級との反撥か、融合かというような見当外れの形でおこなわれたため、思想的な意味をもつことができなかった」という批判もまた、おそらくそのまま佐藤にも相当することになろう。

例へば、今更のごとく民族の事をいふ代々木の闘士は滑稽でしかないといふのだ。民主民族戦線、チトオの悲劇と呼ばれるユゴ共産党の出来事を耳にするまでもなく、戦争の追ひつめられた袋小路の中で、死よりも強い背理に対決し、現実の圧力と戦ひをやめなかつた目に見えない知識人達をも一束にからげてファシスト呼ばはりし反動ときめつけ、内容としての社会主義、形式としての民族を唱へてうそぶき、満州事変以来の歴史的瞬間には全く不存者でしかない。合法舞台にも凡そ人間として可能な限りの良識を失はず無数の抵抗が行はれたのである。最後の瞬間まで。民族といひ人民といふにしても常に国家主義時代、民主主義時代を問はずそれらを通して二つの異つた立場からの

進歩、保守の二重の立場から問題にされて来たのであり、ひとつの歴史的時代すべてが嘘偽であり夢であったと信ずるやうな人間には、今日の民主時代すべてが一様に有難くもない敵と誤謬の反動期として映ずる日が音づれるであらう。歴史的現実は左様なものでは、断じてあるまい、国外に遁走せしもの、獄中に独坐せし者、かゝる例外者のみが闘いぬいたのだとは言ひ切れまい、英雄は地上にて彼の隠れたる営みをつづけてゐた草花であるかもしれない。（高田博厚宛佐藤徹書簡下書〔I〕一九四六年八月末日付、市立米沢図書館蔵）

(32) 日本教養組合連盟の中央委員には、大河内一男や羽仁説子らが名を連ねている。

(33) 拙稿「横尾健三郎」（日本近代文学会東北支部編『東北近代文学事典』勉誠社、二〇一三年六月）など参照。

(34) 前掲註（17）を参照のこと。

(35) 真壁仁「森英介」（前掲）。

(36) 「我等の「労農」を強大せよ!!／新しき夢のために闘へ!!」（『労農』第一巻第二号）の全文は以下のとおりである。

［1　編集方針］民族的コースに立つ民主革命実現のための具体的指導理論の探求／工場・農村・あらゆる生産点に於ける指導層／心ある能動的知識分子に直接訴へる行動理論の創出／地方的なるもの―政治―文化の重要性　認識

［2　編集網の確立］各地方の情報・意見を活発に交流　通信員の確立／読者との共同編集／定期会員の論文掲載・相互研究

［3　頒布網の確立］三千部発行　三号実現／急速に　全国各地の誌友拡大運動を展開せよ／一人の誌友は七名の同志を!!／書店からの読者は定期予約会員へ　支局の設置へ!!

［4　労農社の経営合作社運動］会員頒布制の確立／読者の共同経営の実現へ　基金、二万円を急速に獲得せねばならぬ／寄附金の募集に協力せよ。

(37) 河西英通『続・東北――異境と原境のあいだ』中公新書、二〇〇七年三月、終章「「深日本」としての東北」。

(38) 一九四八年二月四日付高村光太郎宛佐藤徹書簡（市立米沢図書館蔵）。